

ワークショップの開催での成果と問題点

花 田 博 之

(農学部附属農場)

目 的

近年の畜産は環境問題を解決せずには通れない現状である。入来牧場でも地域と一体となり問題に取り組んでいる。土着微生物を利用し、糞尿の臭気や堆肥発酵の問題について検討し実績を得ている。県内畜産農家や行政等の土着菌に関する相互の技術交流を図りながら、土着菌利用の相互理解や連帯を深めることを目的に、今回はじめて畜産における土着微生物の利用について、2000年9月18日入来牧場でワークショップを約1000名の参加で開催した。主催は鹿児島大学全学合同研究プロジェクト（事務局：鹿児島大学農学部附属農場）が中心となり計画し、地域での土着菌利用の成果及び検討会が行われた。アンケート調査結果について紹介する。

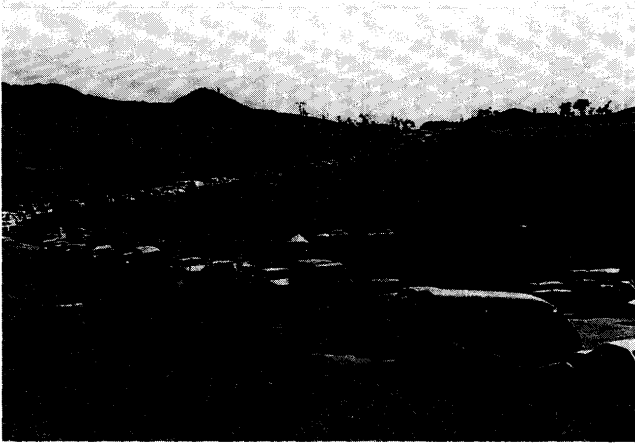
方 法

午前中は土着菌採取法・培養の実演と説明・場内見学・午後から基調講演・地域での取り組みと課題について発表があった。参加者が多くて駐車場があふれ道路上に駐車した、このことは土着微生物に対する感心の深さが伺われた（第1図）。肥育舎横広場において、土着菌採取法や培養法等の実演実技を行った。育牛舎、豚舎に於ける実態状況や土着微生物培養装置の機械説明や検討を行った（第2、3図）。午前の部が終わったところでアンケート回収を行い質問や意見があり、意見交換の資料とした（第4図）。機械格納舎に仮設テントを設置した会場で基調講演、地域での取り組みと課題について発表があり、県内で土着菌を利用している農家や関係機関で成果と問題点が出された（第5図）。発表終了後、総合討論が行われた。いろいろな質問が出た（第6図）。

結果および考察

当日は好天気にも恵まれ、場内の駐車スペースもなくなるほど大盛況であった。参加者数が把握できないので検討会会場、駐車場等の準備に心配した。現在の施設では、雨天時の開催施設の確保が必要だ。土着菌採取法、培養の実演を全員一緒に行ったので人が多くてよく聞き取れない部分があった、部門ごとに何回か行って欲しい。牛舎や豚舎の悪臭の少ない事と、餌としての利用法や発酵堆肥への使い方に関心が多かった。OHPやプロジェクターが仮設テントのために室内が明るく、みにくい部分があった。土着菌の利用する事で問題解決に希望が持てたので自分も利用したい。今後も指導をお願いしますなどの、意見が多く土着菌の普及できた事で参加者には有効なワークショップであった。

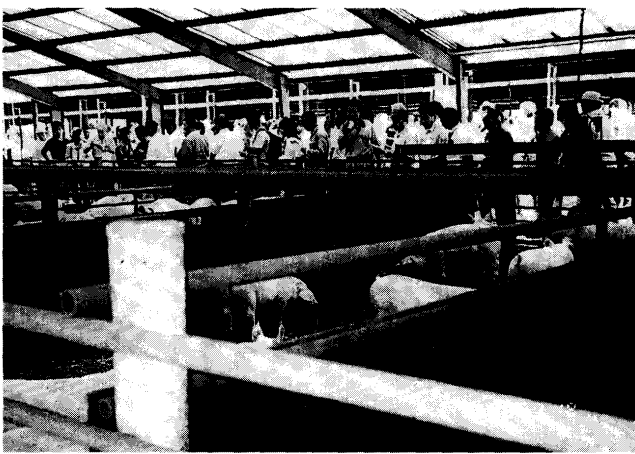
今後牧場では、ワークショップ開催の経験を生かし、土着微生物を利用し地域における問題等の解決に、役立つことが出来るものと思われる。



第1図 参加者の駐車風景



第2図 土着菌の培養の実演



第3図 発酵床豚舎見学



第4図 アンケート回収状況



第5図 地域での取り組み者の発表



第6図 発表者との検討会